

富士北麓参詣曼荼羅

『富士北麓参詣曼荼羅』は、伝統的な技法を用いて現代的なテーマやモチーフを精巧に描いた作風で知られるアーティスト、山口晃氏が依頼を受けて制作したものです。

参詣曼荼羅は、16世紀以降に日本各地で制作された霊場の全景絵図です。これらの絵図は、描かれた霊場の信仰的な重要性を信徒に伝えるとともに、巡礼者にとっての旅行案内の役割を果たしていました。

山口の曼荼羅は北側から見た富士山（富士北麓とは“northern foot of Fuji”という意味）の図です。巡礼者たちが登拝前に休息をとった川口と吉田の町や、他の宗教的な儀式を行った忍野八海など、富士山周辺の風景が詳細に描かれています。吉田から富士山頂まで延びる吉田口登山道は、神仏の拝所であった道沿いの山小屋と石室の明滅する灯によって照らし出されています。雲に囲まれた山頂の上空に光の点は、そこに住んでいるとされる仏教の9神を象徴しています。山口は人間と神々の世界を隔てる帳が最も薄くなる夜の場面を描くことを選びました。

他の参詣曼荼羅や日本の「鳥瞰図」と呼ばれる絵画全般と同様、この作品もパースが固定されておらず比較的平面的です。画家の視点は自由に移動し、それぞれの題材を最も適した角度と距離感で描いています。（山口はこの地域を訪れた時に仲良くなった猫、みいちゃんまで描き込みました。）完成した作品は、永久の富士山を中心とした、過去と現在のスケッチの緻密なコラージュです。